暮らしと県政・熊本

No. 10　1974

—目　次—

■老人福祉特集
・あなたの老後のために！
Ⅰ 老人問題とその背景……10
Ⅱ 老人福祉対策事業のすべて……12
・私の老後はこのように……26
古閑とし子・田尻美義
■すべての児童に福祉を……その対策……28
■健康管理対策の推進状況……30
■農村総合整備モデル事業……31
■＜この人と30分＞
料理は愛情　江上トミ……33
■熊本県の商業と石油問題
……山崎良也……36
■グラビアページ
・＜ふるさとの心＞……野坂の浦……3
・長寿日本一　梅田ミトさん……17
・苓北—上海　日中海底ケーブル……18
・南に伸びる縦貫道工事……19
・カラー熊本……20
・いよいよ着工　高千穂線鉄道工事……22
・過疎地に黎明を……23
・物資対策・デパート火災……37
・冬の環境を豊かに……38
■海外レポート
熊本県ハワイ物産観光展報告……24

随　想　欄……6
'74 県政に対する期待や提言
河野正夫・松本孝治・井尾重雄・下瀬桂子
那須敬一・犬童俊一・白石　豊・小崎　幸

表紙は、「ハリコノトラ」　材料は八代市宮地の和紙とのりで作り、胡粉で仕上げる。宇土市の特産で90年の伝統がある。

▲水島については２説がある

芦北の野坂の浦ゆ舟出して水島に行かむ
　波立つなゆめ
聞きしごとまこと奇しく尊くも神さびおる
　かこれの水島

▲芦北海岸にある歌碑

歌材対象となった芦北海岸は風光明媚の地であり、現在国民休養地整備事業が着々と進められている。

遠くもわれは

隼人の　薩摩の迫門を　雲居なす　遠くも　われは今日見つるかも　（万葉集巻三・二四八）

この歌の意は難解ではない。隼人の住むという薩摩の海峡を今日は雲煙の彼方に遠く眺めやったということであろう。しかし、この平易な歌を何度も口ずさんでいると、歌の調べの奥から万葉びとの旅情が私たちの心に静かに伝わってくるようだ。

飛鳥時代の慶雲二年（西暦七〇五年）のころ、朝命により大和藤原の京をあとにし、筑紫に遣された長田の王は、肥後の国を訪れ、ある日、芦北海岸の野坂の浦から舟をだした。王は水島を自らの目で確かめてみたかったのであろう。水島はかって景行天皇が不知火の小島に渡られたとき、喉のかわきを覚えられ、神に祈られるや忽ち泉が湧いたという伝説があったのだ。王は伝え聞いたとおりの島に満足し、別に二首の歌を作った。

冒頭の歌はこの水島行の前後につくられたものであろう。

芦北海岸を舟出した一行は不知火海を渡っていた。周辺には櫓の音が静かに響いていたであろう。従者たちはなごやかに座談に興じていたであろう。

王はそのとき、首をあげて遙か南に幾重にも重なりあう雲と海の水平の接するあたりを見ていた。南の沖が大和朝廷の治世の及ぶ限りであり、その彼方には隼人の住むという〝異国〟があることを王は思った。

そして同時に、大和を離れ、陸行水行、旅の仮寝の長い夜をへて、「遠の朝廷」と呼ばれた筑紫・太宰府までたどりついてきた今までの自らの遙かな旅路のことに思いを馳せた。

しかも、今日はその太宰府さえもあとにし、異国との境を接する遠来の地の海にいち枚の木の葉のようにただよっている己れではないか。

「……遠くもわれは……」王の心の中に言葉が生まれた。王はひととき周辺の談笑も耳に入らぬ思いで黒の瀬戸の海峡に重なりあう遙かな雲の群れをみつめていたことであろう。

舟はその後、どこを回航したか今となっては誰にも分らない。

思うに、心に生きる旅とは、旅を生かすこころを己れのうちに持っていない限りできないことだ。そして、また、旅を生かすこころを持っていれば、どんな旅でも心に生きる旅となるものだ。

ひとりの王が遠来の思いをこめた歌は、ふるさとの海に今日も生きている。